

寄稿

大切にしたい「観る」「創る」「演じる」こと

札幌市こどもの劇場やまびこ座 館長 山田美奈

私はこの3月まで30年近く札幌市内の児童会館で勤務していましたが、この間、こどもたちを取り巻く環境は目まぐるしく変化してきました。デジタル化やIT化により便利になった一方で、コロナ禍の影響もあり、人と深く関わることや時間をかけてじっくりと取り組むことがずいぶんと少なくなったように感じます。また、最近はこどもの体験機会が減少しているという話を耳にしますが、こどもの文化芸術の面でも、こどもたちが演劇や人形劇に触れる機会がどんどん減っています。ひと昔前までは、小学校で当たり前のように演劇などを鑑賞する機会やこどもたちが演じる機会も多くありましたが、時代の変化の中で、どちらも減少してしまっていることが本当に残念です。

私ごとですが過去に演劇に携わっていた経験から、こどもたちにも演劇の楽しさを知ってほしいと思い、機会を見つけては児童会館で人形劇などの観劇会を行ってきました。家庭の状況や劇場が遠いなどの理由により、観劇経験がほとんどないこどもたちも多く、観劇会ではキラキラと目を輝かせて、一喜一憂しながら楽しんでいる様子や、見終わった後に人形劇のまねっこをして遊ぶ姿もよく見る光景でした。また、少し前の話になりますが、小学校の学習発表会で、当時小学3年生のこどもたちの「泣いた赤鬼」を見る機会がありました。こどもたちと先生が、全て手作りで作上げた作品でしたが、人間と仲良くなりたい心優しい赤鬼のせつなさ、青鬼が赤鬼のことを思い去っていく場面などを丁寧に演じており、胸がいっぱいになりました。普段、児童会館で見る彼らは、いつも元気いっぱいで、やんちゃなことをしては注意されることもしばしばありましたが、この時は真剣なまなざしで、一つの目標に向かって一生懸命に取り組んでいる様子が伝わってきました。今は中学生になった当時のこどもたちは、多くの大人から「素晴らしかった」と声をかけられたことが本当に嬉しかったこと、このことで自信がついたことを笑顔で話してくれました。このことから、こどもの時代に「観る」「創る」「演じる」などの文化的な体験をすることが、こどもたちの成長に大切であることを改めて感じました。

「観る」体験では、登場人物と一体となって喜怒哀楽を体感したり、物語の先を想像したり、さまざまな心の動きを感じることができます。「創る」体験では、台本づくりや道具の製作、音楽

や効果音、照明の必要性やタイミングなど、発想力・創造力を駆使しながら地道で根気がいる作業が必要となります。「演じる」体験では、役作りの難しさや楽しさを知るとともに、日常とは違う一面を表現することができます。また、練習ではうまくできても、本番でセリフが出てこない、必要な道具がない、段取りが違うなど、思いもよらないハプニングに見舞われることもしばしばありますが、緞帳が上がってしまえば、自分たちの力で何とかやり遂げなくてはなりませんので、お互いを信頼し乗り越える力が必要となります。そして終わったあとの充実感や達成感、自信を深め何よりも得難い体験となり、次のステップや新しいチャレンジへつながっていくことと思います。

こどもたちはこどもの時代にさまざまな経験をすることで、心身ともに健やかに成長し、生きる力や人との関わり方など、さまざまなことを学びます。どんなに便利な世の中になっても、仲間とコミュニケーションを取りながら手間ひまかけて取り組み、やり遂げる経験は大切なことだと思いますし、心の豊かさを育てるためには、こどもの時代に演劇や人形劇などの文化芸術に触れ、体験することが大切な要素の一つになると信じています。

こどもたちの可能性は無限大です。こどもの文化体験機会が少なくなっている今、「こども文化の発信基地」としてのやまびこ座・こぐま座の役割は大きいと感じています。文化芸術の裾野を拡げ、演劇や人形劇がこどもたちにとって身近な存在となり、こどもたちの未来が豊かなものになることを願って、今私たちができることから取り組んでいきたいと思っています。

山田 美奈(やまだ みな)

1969年生まれ 札幌市出身
平成5年、現在の公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会に入職。札幌市内の勤労青少年ホーム、児童会館6館で勤務し、令和7年4月より現職であるこどもの劇場やまびこ座館長として着任。
私生活では高校時代に演劇活動をスタート。社会人になって市内のアマチュア劇団に所属し、出産・子育てに突入するまで芝居漬けの日々を送る。また、子育てが落ち着いた最近では、子どもアドボケートとして市内の児童養護施設でボランティア活動を継続中。楽し日々、子どもたちの健やかな成長を願っています！



みんなで楽しめる場ってどんな場所？

【第1回】——いろいろな視点から考えてみよう！

はじめまして、正木千尋と申します。

仙台を拠点に、障がいのある人たちと一緒に舞台をつくる取り組みに関わっています。昨年は、ピクニックシアターに仙台の仲間たちと参加させていただきました。

突然ですが、「みんなが楽しめる場」とは、どんな場所でしょうか？そして、「みんなが参加できる芸術」とは、どのようなものでしょう？

「インクルーシブアート」という言葉も少しずつ広まりつつありますが、実際にどう取り組めばよいのか、模索している方も多いのではないのでしょうか。

この連載では、さまざまな立場から「みんなで楽しめる場」づくりに関わる方々にお話を伺いながら、今、私たちにとって必要な場所とは何かを一緒に考えていきます。

第1回は、ろう者と聴者が協同で公演を行う「デフ・パペットシアター・ひとみ」（以下デフパペ）の代表・榎本トオルさん（ろう者）と、同劇団の創立に関わった森元勝人さん（元現代人形劇センター理事長）にご登場いただきました。

正木：デフパペに関わるようになったきっかけを教えてください。

森元：私がひとみ座に入団したのは23歳のときです。「ひょっこりひょうたん島」の番組に関わり、その後全国のおやこ・子ども劇場、小学校の演劇教室で各地の皆さんとの出会いがありました。38歳のときに宇野小四郎さん※1から「ろう者と人形劇をやってみないか？」と声をかけられたのがきっかけでした。手話は視覚的な言語で、人形劇も視覚的な芸術、相性がいんじゃないかという発想でした。ちょうど1980年は国際障害者年。障がいのある人たちがお芝居を観たい、そして自分たちも表現をしたいという動きが世界的に広がっていた時期でもあり、私自身も興味を持ちました。

最初は手探りでスタートでした。ひとみ座メンバーにとってはろう者とのコミュニケーションは初めてで、ろう者にとっても人形劇は初体験。同じ目線でたくさん話し合い、一緒に模索してきました。当時は「インクルーシブ」なんて言葉もなかったけれど、「誰にでも観てもらえる人形劇をつくろう」という気持ちはみな同じでした。音声を使

わない表現を追求する中で、けこみ芝居ではなく出遣いの形式が適しているという結論に至りました。初演はギリシャ神話の『オルフェ』。障がい教育関係者からの好評もあり、全国巡演を目指す大きな一歩となりました。

榎本：私は山形で手話劇をしていたころ、知り合いに「ろう者と聴者が一緒に演じる、今まで観たことのない人形劇がある」と紹介され、デフパペの山形公演を観に行きました。その後も、山形公演のたびに劇団と交流を重ねる中で、表現力やさまざまな仕事に挑戦し続ける姿に惹かれ、入団しました。

※1 宇野小四郎：公益財団法人現代人形劇センター及び、人形劇団ひとみ座の創立者のひとり。（第2回に続く）

正木 千尋（まさき ちひろ）



人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」にて7年間、企画制作を担当。その後、仙台に拠点を移し、NPO法人エイブル・アート・ジャパン主催「広場の人形劇」など、障がいのある方々と舞台をつくる事業にコーディネーターとして携わる。現在は一般社団法人パップスの共同代表として、「ひとりに寄り添う人形劇（観客は一人）」の開発を行い、誰もが芸術を楽しめる場づくりを目指して活動している。

ほん MA・SO・BO シェルジュ HON-CIERGE

本の案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ⑧

「花さき山」

斎藤隆介 作／滝平二郎 絵／岩崎書店

10歳のあや山に迷い込み、やまばに会います。そこで目にしたのは、山一面に広がる美しい花。その花はなぜこんなに咲いているのか？やまばは、その理由を静かに語ります。黒を基調とした切り絵の美しさが見る人の目を奪い、独特の語り口調が物語の世界へと誘います。私はこの絵本と出会って、道端に咲く花の意味を考えました。誰にも気付かれないと思っていた自分のささやかな親切が、もしかするとどこかで美しく輝いているのかもしれない。そう思うと、自信を失いかけた時も前を向く力が湧いてきました。誰かのために生きる喜びをそっと教えてくれるこの物語は、子育てに携わる人はもちろん、今を生きる若者の心にも優しく響くことでしょう。



岸 春江（きし はるえ）

フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士・絵本セラピスト®／自宅に約3000冊の絵本を所有。主宰の「ファンタジアバル」は2019年、北海道読書推進運動協議会「優良読書グループ 奨励賞」受賞



「ねずみのかいすいよく」

作：山下明生／絵：いわむらかずお／ひさかたチャイルド

7つごのねずみの兄妹は家族で海水浴へ。わんぱくな子どもたちは、お父さんに見守られながら夢中で遊びます。そんな中、予想外の出来事が——さあ大変！ハラハラドキドキの展開の中、みんなで力を合わせて乗り越えます。夏の読み聞かせ会にこの絵本を持っていくと、きらめく海で楽しそうに泳ぐねずみたちに、聞き手の子どもたちは自分の体験を重ねることでしょう。ほかにも季節にあわせたお話があり、一年を通して自然の中での楽しみ方を見つけられます。何度もページをめくりながらじっくり絵を眺めると、兄妹それぞれの性格の違いが見えてくるのも面白いところ。シリーズを読み進めることで、ねずみたちの個性をより深く楽しめます。



中島児童会館・こぐま座資料室MA・SO・BOには札幌のこども文化の歴史が凝縮されています。周辺の中島公園は、緑も鮮やかで気持ちのいい季節です。散歩ついでにお立ち寄りください。今号よりMA・SO・BO通信の編集を担当します。通信についての皆様のご意見感想をお待ちしております。（戸塚）

